

【果樹】 高温条件下における果樹の栽培管理について

令和7年8月1日

県北農林事務所農業振興普及部

1 果樹における高温・乾燥の影響

(1) 過去の高温・乾燥年の記録に基づく主要果樹への影響

高温・乾燥の気象条件下での各樹種における果実品質及び樹体並びに病害虫への影響が出る項目は表1、2のとおり。

表1 高温・乾燥による各樹種の果実品質への影響

(◎：影響大、○：影響あり)

	影響	もも	なし	りんご	ぶどう	かき
品質	肥大不良	◎	◎	◎	○	
	着色不良	○		◎	◎	
	酸の減少				○	
	蜜入り不良			◎		
	異常成熟果 (生理落果・青実果)			◎		
	果肉障害	○	○			
	日焼け		○	◎	○	○
	横ヒビ・裂果			○	◎	○
	軟質果の発生	○	○	○	○	○

表2 高温・乾燥による各樹種の樹体及び病害虫への影響

(◎：影響大、○：影響あり)

	影響	もも	なし	りんご	ぶどう	かき
樹体	樹勢衰弱・枯死	○	○	○		
	黄変落葉	○	○	○		
	葉焼け		◎		○ハウス	
病害虫	ハダニ類	○	◎	◎		
	ナシヒメジキイ(晩生種)	○	○			
	ナシマルカガラムシ	○	○	○		

注) 波線部分は、令和7年度に項目を追加した。

2 今後の技術対策のポイント

(1) 土壌の水管理

各樹種とも生育状況に合わせて、かん水を実施する。葉色の低下、葉の萎れや黄変落葉が見られる場合は早急な対策が必要である。

1回のかん水は25～30mm程度(10a当たり25～30t)を目安とし、5～7日間隔で実施する。

ももでは、収穫5～7日前以降のかん水は糖度など品質の低下につながりやす

いので、かん水が必要な場合は早めに実施する。

なしでは、夏季の土壌乾燥により「あきづき」「王秋」でコルク状果肉障害が発生しやすいことから、状態に応じてかん水を実施する。

ぶどう等の裂果は、土壌水分の急激な変化で誘発されやすいことから、園地の状態に応じて定期的なかん水を行う。

(2) 草刈りの実施

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行う（地表面からの蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされる）。

(3) 新梢管理

新梢管理は樹冠内部の徒長枝を中心に、通常よりも軽めの夏季せん定を行うなど、骨格枝背面の日焼け防止や樹勢を落とさない管理を心がける。

樹勢が弱い樹では、発生した発育枝等は全て切除せず適宜残して配置し、適正な樹勢の維持を図る。

なお、りんごやぶどうでは、果実の成熟期に樹勢が旺盛な場合、果実の着色が劣りやすいことから樹勢の適正化に努める。

(4) 着果管理

りんごでは、果実に直射日光が当たると日焼け果が発生しやすくなるため、葉で隠れるような果実を残すなど着果位置に留意する。

ぶどうでは、着房過多が着色不良を助長させることから、適正な着房数に調整する。

(5) 適期収穫

ももでは、収穫間際に 35℃以上の高温が続くと成熟が遅延するので、成熟状況に注意し適期収穫に努める。また、核や胚に障害を持つ果実では特に成熟が早まる傾向があるので、収穫が遅れないように注意する。

なしでは、熟度の進んだ果実で果肉が水浸状となる（みつ症）の発生が多くなることから、収穫が遅れないように注意する。

りんごでは、特に早生品種から中生品種にかけて、着色が不十分でも地色の変化や果肉硬度等の果実の成熟状況に注意し、収穫が遅れないよう適期収穫に努める。

ぶどうでは酸の減少が早まることから、食味を確認して適期収穫に努める。

また、いずれの樹種も収穫時の果実温度が高いと果実が軟化しやすい傾向にあるため、収穫は気温が低い時間帯に行い、収穫後は直射日光を避けて涼しい場所に保管する。

(6) 害虫防除

高温乾燥条件下ではハダニ類の発生が増加し、葉焼け等の被害を助長させることから、発生状況をこまめに確認し適期防除を実施する。また、ナシヒメシンク

イヤナシマルカイガラムシの発生世代数が増加し、果実に被害を及ぼす可能性があることから、発生予察情報等を参考に防除を追加する。

4 参考資料

- (1) 平成 22 年の高温による農作物等への影響と技術対策
- (2) 平成 30 年高温・少雨対策の記録
- (3) 令和 5 年高温・少雨の影響
- (4) 令和 7 年 7 月 7 日 高温条件下における果樹の栽培管理について